



サザエさんのカツオくん

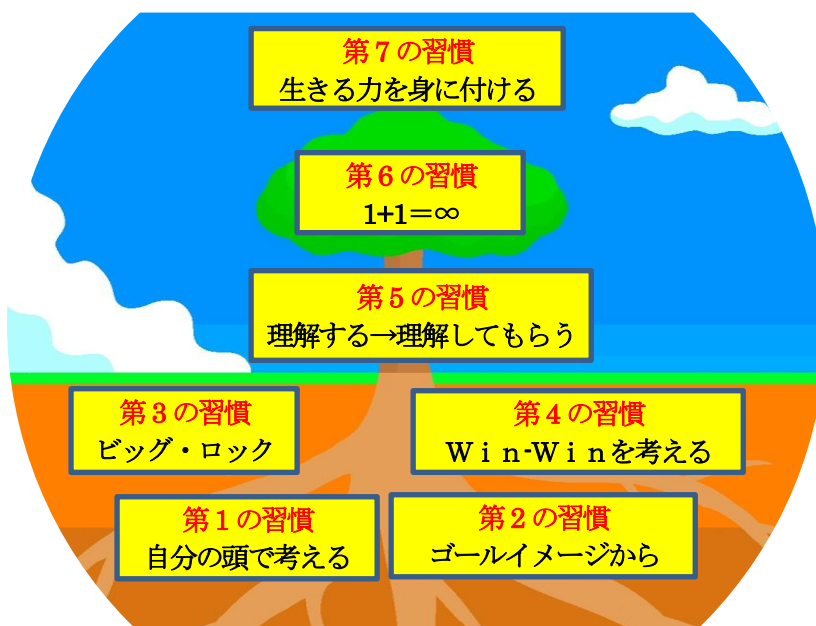
帝京大学小学校 校長 石井 卓之

8月末の「サザエさん」では、必ずといってよいほど、夏休みの宿題が終わっていないカツオくんのエピソードが鉄板ネタとして登場します。2学期が始まる前日、または前々日あたりの想定で話は始まります。カツオくんの対処方法はいくつかあります。かおりちゃんや早川さんに宿題を写させてもらう（中島くんの場合もあったような気がします）。花沢さんは、カツオくん曰く「止めておこう…。」でした。また、マスオ兄さんに泣きつくこともよくあります。そしてとうとう、波平さんに隠し通すことができず、叱られながらも一家総出で完成させるというクライマックスを毎回迎えます。カツオくんの勉強嫌いが根底にあります。いつも人間関係能力で乗り切っています。社会に出てからは案外、大成するタイプかもしれません。花沢さんのお父さんはその能力を認めて花沢不動産の後釜にと誘っているようですし。

では、少し観点を改めてカツオくんの行動を見ていきたいと思います。これまでの学校や家庭では

- ・宿題を計画的に行うために、1日の生活時程表を作る（作ることで安心してしまう）。
- ・宿題を行うように、声をかける（どこまでできているのかを、確認はしていない）。

という関りが主でした。しかし、本当に必要なのは自分自身の特徴を客観視する力（メタ認知）や宿題を終えたゴールイメージにたどり着くための見通しをもつことです。そこを起点に、オリジナルの取り組み方を編み出すことができれば、カツオくんの夏休みの最終日はすばらしいものになることでしょう。もちろん、初めからできることではありませんし、大人でも難しいことだと思います。しかし、低学年の時代から始めは大人が手順を教え、一緒にやってみて、成功したことは大いに認める。できなかったことは叱るのではなく、なぜできなかったのかを子どもなりに考えさせ、修正できたことを評価していく。コーチングの手法が重要だと考えています。そして、段階的に関りを減らしながら子どもの自己調整能力を育てることが大切です。カツオくんの自由研究を「町内の問題をみつけ、解決しよう」というテーマにしたら、仲間を巻き込みすばらしい活動をしそうな気がします。教科の宿題はその仲間と集まったときに短時間行えば、できるのではないのでしょうか（分からないことも聞けるので）。やりたいゴールが目の前にあれば、苦手なことのハードルは下がりますので。



私が昨年度から子どもたちに話している「自分の頭で考える」や「ゴールイメージから」はフランクリンコピー氏の「七つの習慣」を基にしています。採決のときに、単なる多数決で決めるのではなく、お互いの考えのよさを認め納得解を導き出すことは「Win-Winを考える」につながります。「ビッグ・ロック」は、大事なことを最優先して行うこと（バケツの中に先に小さな石を入れてしまうと、大切な大きな石が後からは入れられない）、「 $1+1=無限大$ 」は、協働性の大切さを目指しています。